
DarkBlack - 11

柊千終

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DarkBlack - 11

【Nコード】

N9245Z

【作者名】

柊 千終

【あらすじ】

日本政府最高機密の特殊機関。最後の切り札と称される組織に所属する高校生里見神楽。表では普通の学生、裏では抜けた身体能力を駆使して任務を遂行するエージェントである彼の日々を綴る。

初めてアクションを書いて見ました。本格派にはほど遠いですが頑張ります。ありきたりですいませんm(´▽`)m

…やれやれ、どうなることやら

始動

9月12日午後2時30分、日本が世界に誇る重機メーカー『四荻^{しおぎじ}重工^{ゆこう}』の中核となる中央技術開発研究所が、突如武装集団に占拠された。

全研究員1300人を人質にピースユニオンと名乗った彼らは政府にこう要求した。『日本政府が不正にプールした裏金500億を支払え。要求が呑めない場合は、人質の殺害は勿論四荻重工と日本政府が秘密裏に開発している軍事兵器の詳細を全世界に開示する。リミットは今から24時間以内。明日の午後2時30分が最終期限である。貴君らの賢明な判断を期待する。』
直後から政府内は騒然とした。要求に従えば、裏金の存在を認めた事になり、国民からの信頼を失うが従わなければ国際的な立場が危険なものとなる。

どちらを選択しても最良なものはない。最初こそ武装集団を全滅させて強引に解決してしまおうという警察庁の考えからSAT（特殊急襲部隊）が二個小隊投入されたが、結果は失敗に終わった。

日本警察が誇る対テロの精鋭部隊が事件解決どころか逆に全滅させられた。

ピースユニオンは高度に訓練されたプロの兵士だったのだ。複雑に入り組んだ建物内部という地の利を生かされ、SAT隊は成す術もなく壊滅した。所詮は警察の部隊。

訓練を受けているとは言っても戦場を経験し、殺し合いの場を生き抜いて来た軍人とは根本的なスペックが違う。

重犯罪が多発する欧米諸国では警察部隊にも相応の装備と技能がある。アメリカで云うならSWAT。イギリスで云うならERUなどだ。しかし、平和ボケした日本国の警察に解決できる訳が無かったかといって自衛隊の部隊を出動させる程大事にはしたくない。

今は報道管制を敷いて情報が漏洩しないようにしているが、それも時間の問題だ。IT社会の現代で秘密を維持しておく方が難しい。どこからかの隙間から漏れれば、ネットを通して爆発的に広がる。

時間は無い。が、具体的な打開策も考えつかない。

正しく八方塞がり。ただただ時間のみが無情にも過ぎていくだけだった。

研究所の周りには無数の警察車両が待機し、数百人体制で機動隊が網羅していた。だが特に行動を起こす訳でもなく、ただそこにいるだけ。

指示を仰いでも返ってくるのは待機命令のみ。待つだけでは、結果は出ない。時間も少ない。正に膠着状態である。一向に進展しない状況に苛立ちを感じるも残念ながら、彼らは警察組織の末端。上の言う事には従うしか無い。組織とはそういうものなのだ。

「くそッ！上は何を考えてやがんだ。1300の人命が掛かってんだぞ。何時までもビクビクしやがって、守るべきは面子じゃねえだろっが。」

憎々しげにそう呟く1人の隊員。フルフェイスメットに隠れた顔にはまだ若さが見えた。彼の名は氷室修輔^{ひむろしゅうすけ}。県警警備部第四機動隊所属の巡查だ。

現在20歳という若さゆえ血気盛んであり、先走る気持ちも理解出来るが恐らく待機命令が解除されたとしても彼らは動けないだろう。機動隊の主任務は警備であって突入ではない。特に彼が所属している第四機動隊は治安警備を担当している。よほどの特例でもない限り彼らに突入命令が下る事はない。

結局はここで眺めるしかないのだ。全く終焉の兆しが見えない上にも手も足も出せないこの事態。保身しか考えない上層部の消極的な態度。近づくタイムリミット。

氷室は怒りと虚しさにメットの奥で歯を食いしばる。これでは何の為に警察官になったのか、第一に市民の安全を考え行動しなければならぬ筈なのにやっている事は全くの逆。

腐ってる！上層部の連中が守ろうとしているのは人命ではなく自らの安全だけだ。

別に警察がクリーンな組織であるとは思っていなかったが、その実情は想像の遥か上を行っていた。

“人間”が取り仕切る以上は必ず歪みは出てくるものだ。そう割り切らなければとてもじゃないがやって行けない。

警察官としての正義感を持っている氷室のようなタイプは寧ろ稀少であると言えよう。

「ちっ、ふざけやがって。」

吐き捨てる。それしか出来ない。幾ら怒りを覚えたとしても自分は単なる平巡查。全体から見れば下も下の底辺に位置する組織を成り

立たせる歯車の1つに過ぎない。

つまりは無力。半ば冷め切ったような思考で客観的に自分を見たらそこにあつたのは直情的なバカの姿だった。

吼えるだけで噛みつけない。それだけで充分弱い負け犬だという証拠になる。

最終的には言われた事をするしかない。待てと言われれば待てなのだ。

遂にはそこに行き着く自分が情けなくてつくづく嫌になる。唇を噛み締めて、拳を握りしめて。

耐える。なんと無様だろうか。自嘲気味に薄く笑い

「あ?」

前を見たそこに部外者が近付いて来ているのに気付いた。それは少年だった。年の頃は10代半ば。どこかの学校の極めてノーマルな学生服を着て、スタスタと正面から歩いてきている。

「は?何で民間人がここに?正面ゲートの警備は何をしてんだ。」
研究所の入り口は正面ゲートから第1ゲート、第2ゲートと三重構造になっている。氷室は第2ゲートの警備担当であるのでこの少年は少なくともゲートを2つ突破しているのだ。

見るからに不審人物とまでは行かないが明らかに一般人の風体。それもまだ子供。更にここまで来ている以上間違つて迷い込んだというのは有り得ない。

この件は極秘事項となっている為、もしも一般人が入り込んだらそ

れ相応の“処置”を取る必要性があるからだ。

しかしだからといって関係者にも全く見えない。というか高校生ぐらいの少年がどう関与していると言っのだろうか。

誰も考える筈もない。普通はそうだ。そうなのだが、今現在少年がテロ現場に居るのも変えようがない事実。

状況を全く把握出来ない。だが、正体が分からなければ通す訳にも行かない。

どうすべきか結論付ける前にもう謎の少年は目の前まで来ている。その足取りは緩やかで若干のたるさを醸し出しているが、迷いがなかった。

自分が何をしているのかが理解出来ていないようには捉えられない。寧ろ当たり前の事を当たり前にこなすような、さながら呼吸をするかの如くの“当然”がそこにあった。

「そこで止まりなさい。君がどういう目的でここに来たのかは分からないが、正体が不明である以上この先は通す事は出来ない。」

余りにも特殊過ぎる場面なので、気が動転しているのか声が震えている。

それに対して少年はその足を止め

「またか…。」

と一言呟いて実に億劫そうにポケットから一枚の紙切れを取り出した。

くちやくちやになっっているそれを広げ、氷室の眼前に突き出す。

「なッ……！」

そこに書かれている内容を読んだ氷室は驚愕の意を露わにした。言葉が詰まる。有り得ないとは思っていても実際に目にした以上信じる他はあるまい。

冷や汗を流しながら無言で道を空けた。その横を少年は悠々と通り抜ける。

それは自分から畏へ飛び込むようなものだ。周りから見れば自殺行為に等しいだろう。勇敢ではなくただの無謀であり、偉業ではなくただの愚行。

歩いて行く。警察が有する屈強な対テロ特殊部隊を壊滅させた凶悪な殺人集団が潜む場所へ。どう見ても少年は生きて帰れないだろう。それなのに、誰もその歩みを止めようとはしなかった。氷室ですら道を空けた。何故か？

先程も述べたが、彼らは全員が警察組織の末端。上の言う事には逆らえない。

……少年が提示した紙切れにはこう書かれていた。

『本事項に置いてのみ限定的にこの者【里見神楽^{サトミカク}】に全権を譲与する。これより後本件の解決までこの者の行動を阻害する事その一切を禁止とする。』

警察庁長官 たかはらまこと 高原実 法務大臣 木戸周作 きどしゅうみく 国家公安委員
会委員長 むらしたゆうじ 村下佑司

そこには警察官から見れば、雲上人にも等しい錚々たる名が連名で記されていた。

つまり、今現在あの里見神楽という少年が警察組織その全てを動かせる権力を保持しているという事だ。

そんな彼の進行をどうして止められようか。

「一体：何なんだよあいつは？」

遠ざかる後ろ姿を見送りながら氷室はそう呟いた。

誰もその疑問には答えられない。誰も知らないからだ。少年里見神楽の存在価値は国家機密級。有する影響力は一国の政府も無視出来ないレベルにあると言われている。

「リミットまで後6時間弱、か……。」

里見は腕時計を見て時間を確認すると、今度は携帯電話を取り出して操作し始めた。

とあるコードへ回線を繋げ、彼は告げる。

「現在時刻0825（マルハチフタゴ）これより武装集団『ピースユニオン』の制圧及び、人質の救出を開始する。尚増援は必要ない。繰り返す、増援は必要ない。動かせる人員は全て情報の封鎖或いは工作に着手させるように。オーバー」

独壇場

ジャキツ

金属同士が噛み合うような音を立ててスライドが引かれ、チャンバー薬室に初弾が装填される。

里見が両手に携えているのはアメリカ軍の正式採用拳銃となっているベレッタM92Fだ。

9mmパラベラム弾を使用し、総弾数は15発+1発。

この銃は里見にとって最も使い慣れた武器である為、一連の動作は実に手慣れたものだった。

そのまま中に入ろうとするが、施設内のセキュリティシステムは全て掌握されており研究所は一種の要塞に成り代わっている。当然ながら簡単には侵入すら出来ない。

だが、里見は1秒たりとも考える様子を見せずに躊躇なく銃の引き金を引いた。

乾いた発砲音に弾け飛ぶ指紋認証式のドアノブ。如何に高度な電子機器であってもぶっ壊してしまえばそれで終わりだ。

もはやセキュリティとしての意味を成さなくなった機械の塊を引き抜いて強引にドアを開ける。

敵の数は情報によれば一個小隊程。銃に装填されている弾丸は左右合わせて32発。それに予備のマガジンが二本ある。合計で64発。それで制圧を完了させなければならぬ。油断なく辺りを見回し、ある程度の地理的条件を把握すると真っ直ぐに進み始めた。

既に此方の動きには気付かれている筈だ。言わば施設内全ての監視カメラが敵であるのだから。

どこに潜もうが直ぐに見つかってしまっただろう。ならば、堂々と正面から突入した方が時間短縮にもなる。それに向こうから勝手に攻撃してくれた方が一々探さなくて済む。

* * * *

「何だありや。」

ピースユニオンが一時司令室としている警備センターで監視カメラの映像をモニタリングしていた1人の男は、妙な映像を見つけた。

銃を持った高校生ぐらいの少年が、歩いているのだ。一瞬思わず見返す程奇妙な状況。

場違いという言葉でさえも表現出来ないこの事態。“有り得ない”という方が適切だろう。

「どつした？」

男の声が聞こえたのか、近くにいたもう1人が反応した。

「いや、ちょっとこれ見るよ。一体何のつもりだろうな？ ジョークにしたって笑えねえぜ。」

呆れたような笑みを貼り付けて記録した映像を巻き戻しもう1人にそれを示す。

「……嘘だろ…！」

男はてつきり仲間も微笑なり苦笑なり浮かべるだろうと思っていたのに、予想に反してその顔は戦慄し、強張っていた。

そのまま慌てた様子で口元のマイクから通信を入れる。

「侵入者あり、侵入者あり。現在1階エントランスを直進。2階への階段を進行中。至急迎撃用意を。尚、姿を発見次第射殺せよ。…
…そうしなければ俺達が殺されるぞ…！」

冷や汗を流し、興奮気味にそう付け加える。その尋常ではない仲間の状態に男は理解出来ないでいた。

何を恐れる必要があるのか？ 確かに拳銃を所持しており、正体も分からないが相手はまだ子供だ。

それに自分たちは完全武装の特殊部隊2個小隊を既に壊滅させている。

特殊部隊と1人の少年、人数にしても武装にしてもどちらが脅威的かは比較するまでもないだろう。

「オイオイ、落ち着けよ。どうしたってんだ、たかがガキ1人じゃ

ねえか。びくびくする意味が分からねー。」

「たかがガキ1人だと？ - - ああそうだろうな。あれがただのガキなら俺だって焦りはしねえさ。」

だがな。と一言区切り

「警察部隊を壊滅させた後に投入される人員がただの一般人だと思うか？ - - お前はまだ経験が浅いから知らないだろうが、この国には“切り札”つてのがいるのさ。まさかこの程度の事出張ってくるとは思わなかったがな。」

「この程度、だと？」

どうもピンと来ていないようだが、訝しく思う気持ちも分かる。

国際的大企業の中枢部分をジャックして、政府に金を要求し呑めな
い場合は機密を世界にリークする。それは間違いなく1国家を揺る
がす程の事件だ。

この程度と評価する意味が分からないが、返って来た言葉は実に単
純。それでいて侵入者の危険度を否が応でも明白にさせた。

「どうも上手く理解出来ないようだな。はっきり言ってやろうか？
“奴ら”が介入する状況の基本レベルが1都市が全滅するような事
態だからだ。言ってしまうえば今回は死ぬとしても1000人足らず。
100万人規模の死に対処するような奴らが出てくるには随分と小
さい。」

「ハッ……？」

冗談であればどれだけ良いか。しかし、この男の表情から見てそれは紛れもない事実には違いない。その“切り札”とやらが何なのかは不明だが、少なくとも容易く攻略出来るようなものではないだろう。

「だから言ってたんだ。…やらなきゃやられるってな。気を抜くな。一歩間違えたら全滅するのは俺達だ。」

銃の安全装置を外す。喰うか喰われるか2つに1つ。

下の階から無数の足音が聞こえた。付随して響く怒号、交差する銃声。迎撃に当たった部隊が侵入者と戦闘を開始したのだろう。

「始まるぞ……」

男はドアを蹴り飛ばして外へ飛び出す。それは発砲音が途絶えた瞬間と同時だった。

掃討

銃声、銃声、銃声

三回の発砲音で三人が床にくず折れる。ワンショットワンキル。全員がもの見事に心臓を撃ち抜かれていた。尋常ならざる射撃能力だ。

銃というのは実際素人なら5メートルの距離からでも外すと言われている。更には止まっている物ではなく自由自在に動き回る人間である。

相手も動き、自分も動いている中で全員を一発で仕留める事がどれほど困難か。

熟練の戦闘者でさえも難しいその行為を難なくやってのけた里見。

まだ15歳程度の年齢の少年が何故そんな技術を身につけているのか、否、一体どんな人生を歩めばこれほどの技術を身に付けなければならぬ状況に陥るのだろうか？

「今の奴らでざっと30人か。弾は後予備マガジンが2つ。まあ足りるだろう…」

彼が進んだ道をなぞるように武装した兵士の死体がそこかしこに転がっている。そのどれもが心臓や頭など急所を一発で撃ち抜かれていた。

圧倒的で一方的。少なくとも拳銃よりは強力な兵器をふんだんに所持しているプロの軍人達をそのように見る事が出来るまでにレベルの差があった。

既にピースユニオンは半数以上が殲滅されている。

「……、ッ」

廊下の角を曲がると開けた空間に出た。そこに“あつた”物を視界に入れた里見は小さく息を洩らす。

そこら中に飛び散った毒々しい真紅色。肉片、鮮血、ピンクがかつた灰色は脳漿だろうか。

全身を弾丸に引きちぎられて、抉れ、砕けて、崩れた肉の塊が散らばっていた。最早原形すら留めていない。どうにかこびりついている衣服から察するに恐らく突入したSAT隊の成れの果てだろう。まさに惨劇。死体はとっくに見慣れている里見でも小さく顔を背ける程に、残虐な映像。

里見は死者への最低限の敬意をもって軽く目を瞑り黙祷するとそのまま足早に走り抜けた。

その目は先ほどとは異なつた明確な怒りの色を宿している。直情的な感情は命取りになる。どのような時でも冷静さを保てと何度も教えられてきたが、やはり抑えられなかった。

里見は見た目通りまだ若い。肉体は洗練された戦闘技術を持っていても、心の方は年相応の少年である。1300の人命を救う為に、命を賭して行動した彼らが無残にも殺し尽くしたピースユニオンに怒りは湧く。

油断していたSAT隊にも勿論非はある。このような世界では弱ければ死ぬ。ただそれだけの単純明快。

つまりSAT隊が肉塊と化しているのはただ彼らの力量がピースユ

ニオンよりも格下だったからだ。

…だが、それでも尚割り切れない。理解しているが納得はしていない。

どうであれ、S A T隊が人質を救出しようとしたのは事実である。

確実に、完全に、迅速に……叩き潰す敵は決まった。

容赦はしない。加減もない。最後の1人まで命を刈る。今の里見は野に放たれた一匹の猟犬だ。猟犬が帰ってくる時はただ1つ

……獲物を引き裂いた時だけだ。

ドウツ、と走り抜けるその体が不意に加速した。地面を踏み込み疾走するその姿はまるで砲弾であった。

余りに、迅すぎる。異常なスピード。とても人間が出せる速度ではない。里見が持つ唯一にして絶対の異能^{ちから}

これが彼だけに許され、彼しか立ち入れない世界の姿である。

里見神楽。現役高校生にして日本政府最後の切り札の一員。与えられた任務は確実に遂行する世界最高レベルのエージェント。

その能力^{ちから}は伊達ではない。

その異能^{ちから}は飾りではない。

その技術^{ちから}は偽りではない。

「やれやれ…どうも人をイラつかせる事が上手いようだな。ピース
ユニオン！」

両手の拳銃のマガジンを捨てて予備マガジンを装填する。一連の動作は僅か4秒。

どこか禍々しい殺気を全身から迸らせて里見神楽は動き出す。

異能

「シッ！」短く息を吐いて、弾丸を叩き込む。死屍累々とした状況の中、スピードを緩める事なく突き抜けた。

一階二階はとうに制圧している。予め受けたブリーフィングに寄るとピースユニオンは三階の警備センターを司令塔としているらしい。

そこを潰せば、任務は終了だ。人質の救出及び事後処理は下部の部隊に任せればいい。自分に与えられた任務はあくまでも武装集団の即時制圧。戦う事しか出来ない、命を奪う自分が命を救うのは無理な事。

ただそれまでのルートを構築するのが自分の仕事。

- - 即ち、全ての脅威を迅速に排除する事。それだけが任務でそれさえこなせば問題はない。

ダダッ！と一気に駆け上がって真っ直ぐに警備センターへ向かう。途中の伏兵は最早障害にもならない。

現れた瞬間に急所を撃ち抜かれて血みどろに沈むだけ。全滅するの
も時間の問題だろう。

正面20メートル程先に警備センターのフロントドアが見えてきた。見た目にはなかなか堅牢そうだ。研究所内の全セキュリティシステムを一挙に束ねる機関故にそれも当たり前だが…。

容易には侵入出来ない。だが、逆に言えば一度侵入したならば、全

てのシステムを掌握出来る。

そこが裏目に出た。分散させるのではなく集中させていた。それはつまり占拠されれば最後対抗する術がないという事だ。

施設中の監視カメラで逐一行動を把握され、必要とあらば、セキュリティを誤作動させて対象を閉じ込める事も可能。

言うなれば施設全体が電子の要塞である。

「長居し過ぎたかな……？」

遠くからヘリの機動音が微かに聞こえてきた。警察だけでは埒があかないと判断したのかとうとう自衛隊が投入されたようだ。

どうにも連携が上手くいっていない。この件は手出ししないようにと言っていた筈なのに。或いは単なる自己主張か。

里見が所属している機関は機密性が高い。何も情報が明かされない幽霊のような存在から、手柄を奪われてたまるかとも思ったのだろう。実に愚かで浅薄な考えだ。

どこも対処出来ない判断されたから、里見達の方へ回されたのだ。今更出てきた所で足手まといにしかならない。

余計な仕事を増やさないで欲しいと面倒くさそうにかつ苛々した様子で、彼はその場を足早に離れて行った。

「さて、と……ごちゃごちゃ考える時間もないし一気に強行突破と行きますか。」

ダン！と地面を踏み込み、跳躍。その動作をもう一度繰り返す。

たった二回の跳躍。それだけで20メートルもの距離を0に縮める。常識を越えた身体能力。

物理法則を無視するかのようなスピード。

更に銃声。警備センターのフロントドアその指紋認証型のスキャナ
ーが弾け飛んだ。

強引にこじ開けてから中へ飛び込み、地面を転がりながら素早く2
人を撃ち倒す。

弾けるように起き上がったから、周りの状況を確認する。

真っ暗な室内に浮かび上がるディスプレイには研究所内の見取り図
が移し出されていた。

壁に広がるモニターには施設内の全監視カメラの映像が流れている。
「ほう、噂には聞いていたが実物を見ても信じられんな。」

重厚な響きの声だった。それだけである種の支配力を生み出して
いるような威圧感を感じる。

「ッ！」

背後を捕られた。一瞬のタイムラグが生死を分ける戦場でそれは余
りにも愚劣で致命的なミスである。

しかし、それ以前に全く気配を感じなかった事も恐ろしい。表で転
がっている者達とは遥かに次元が違う。

ゴリツと背に当たる金属の塊の感触を感じながら、絞るように言葉
を出す里見。

「……そうか、間違いない。お前が『ピースユニオン』のリーダー、
ジェンキンス「フォードレットだな？」」

その解答は銃声で。ジェンキンスは里見の背に押し当てた銃を無言で発砲した。

ドン！

一回の破裂音は人一人楽に命を刈り取るだろう。

本領

ドン！

乾いた発砲音に微かに漂う火薬の匂い。確かに引き金は引かれた。しかしそれは里見の体には命中していない。

「…とんでもない速さだな。」

ジェンキンスは痺れた手を庇いながら呟く。

トリガーが引かれる瞬間里見は体を捻ってジェンキンスの手首に手を叩き込んだ。

衝撃であらぬ方向へ弾丸は飛んでいったのだが…ジェンキンスとて戦闘のプロ。不意を突かれたとは言え果たして零距离からの発砲を防がれる事があり得るだろうか？否、普通ならばない。

人間の反射神経などたかが知れている。それにジェンキンスは軍人時代に敵の力を受け流す訓練を受けて来た。

彼の拘束は解ける事はない。相手は力が全く入らないのだ。逃げる事も不可能。

しかし、それすらも振り切る程のスピードで拘束を断ち切られれば？速度にパワーは比例する。

どんな人間も素手で自動車を留めては置けない。

それと同じである。

「ははははは……！！！！！！！！」

眉間に銃口を定められ、殺すという意味表示まで受けたジェンキンスは不意に笑い出した。

彼にはもう武器はない。先程受けた手刀で銃は床に転がり落ちた。取ろうと思えば取れるが、少しでも動けばその瞬間に頭部に風穴が空くだろう。

数メートル離れた動く標的に自らも動きながら性格に急所を撃ち抜く射撃能力を有する里見である。

この近距離でそれも止まっている的を撃ち損じる訳がない。

正しく絶体絶命。ジェンキンスには場を覆すカードはもう無い筈なのに、尚も笑っている。

「何がおかしい？」

「……くくくく、これが笑わずにいられるか。君は致命的なミスを犯した。君レベルの人材を迎え撃つのに私が誰も配備していないとも思っただのか？」

「！！」

直後、里見が構えていたベレッタが弾け飛ぶ。上を見るとそこにも兵士がいた。2階からの狙撃である。

「くっ……！！」

破片と火薬でズタズタになった右手を庇いながら苦悶の表情を作る里見。

「これでチェックメイトだ。最後の切り札だか何だか知らんが、所詮は子供だという事だな。」

そしてジェンキンスは手を振り下ろして一斉射撃の合図を送る。

連なる発砲音。撃ち出されるライフル弾は人間の肉体などとも簡単に引き裂ける。

…だが、続いて重なる爆発音。

「がっ！」

「うぐっ！」

「ぐあっ！」

「ぎゃあっ！」

悲鳴をあげて次々に倒れ込む兵士達。彼らのライフルが全て暴発したのだ。スコープを覗いていた為に密着していた顔面に銃の破片は凶器となって突き刺さった。

「何だ！何が起きた！一斉に暴発するなど…まさか、まさか貴様がやったのか！？」

予想外の事態に狼狽を隠しきれないジェンキンスに対して薄く笑みを浮かべる里見。彼の左手にはもう一丁のベレッタが握られていた。

しかも銃口からはたった今発砲した証拠として硝煙が立ち上っている。

改めて問わずとも今の状況全てが彼の仕業だという事を肯定していた。

「そんな：有り得ん！有り得てたまるか！貴様は一体何なんだ！こんな事人間には不可能だ！」

何が起きたのかを理解したジェンキンスだが、それを納得は出来なかった。何故ならば誰にも出来る筈がないからだ。

そう、自分に向けられた全てのライフルの銃口に一瞬で弾丸を叩き込み、暴発させるなど人間業ではない。

テクニク云々ではなく、人間の身体能力的に無理なのだ。それなのに認めるしかない。

信じないのであれば、先ずは自分の目で見たその全てを否定する必要がある。

「何なんだ、か：さっき言っただろ？俺は“エクゼキューター処刑人”だよ。それにこれ位出来なきゃ俺達の仕事は勤まらないし。」

言っても俺が1番弱いんだけど、と付け足した彼の言葉をジェンキンスはまともに耳に入れられなかった。

彼の目はまた有り得ない物を見ていた。里見の被弾した右手が元に戻っていたのだ。正確に言えば、今も戻っている最中なのだが。

再生という言葉がこれほどぴったり当てはまる場面もそうそうないだろう。

崩れた皮膚が波打ち、合わさり綺麗な皮膚を形作っている。まるで傷が治るまでを早送りにしてビデオ映像で見ているようだ。

「どう…なっている？お前は…人間か？」

「さてね。」

完全に戻った右手の指を、曲げ伸ばししながら様子を確かめる里見はそっけなく言い放つ。左手に持っていたベレッタを右手に持ち替えて、狙いを付けると

「最後に言い残す事は？遺言くらいは聞いといてやる。」

「化け物め…！」

あらゆる恨みを押し固めたような低い声で吐き捨てるジェンキンス。

それに対して

「否定は出来ない。」

一言で返してから躊躇いなく引き金を引いた。

一発の銃声、一発の弾丸はジェンキンスの頭に侵入して、頭蓋を削り取ってえぐり出した脳漿と共に突き抜ける。

後ろの壁に毒々しい黒みがかった赤色がぶちまけられた。

「これが最後の一発だった。なかなか頑張ったよあんた。」

弾切れを示す乾いた金属音を鳴らしながら物言わぬ肉塊と化したジェンキンスにそう呟く。

そして、遠くから近づく複数の足音を聞きながらその場を後にした。

* * *

2階の手すりにもたれかかって突入してきた自衛隊の部隊を眺めながら里見はポケットから携帯電話を取り出した。

「現在時刻0928（マルキューフタハチ）任務終了。後衛の部隊を人質の救出に着手させる。その際救出作戦の障害になるようなら自衛隊の部隊は退去させてもかまわん。尚、情報の工作は徹底的にしておけ。」

報告とこれからの司令のみを伝え携帯を切る。

腕時計で改めて時間を見ると制圧完了まで1時間足らず。

短時間で敵の有利な陣地に単身で突入し、プロの兵士一個小隊を壊滅させた。

驚異的な力を持つ里見だが、それでも彼は自分を最弱だと言っていた。

日本政府“最後の切り札”…その有する力は正しく圧倒的。不可能を可能にする彼らの実力は深すぎて一向に底が見えてこない。

一体彼らは何者なのか？誰が何の為に設立したのか？

未だその一切は不明である。分かっている事は1つだけ。

-
- 彼らに失敗は有り得ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9245z/>

DarkBlack - 11

2012年1月3日04時47分発行